

心合寺山古墳の造営背景についての一考察

吉田野々

心合寺山古墳の造営背景を考えるにあたっては、旧の大和川である長瀬川・玉串川流域を中心に、北と西は河内湖に、東は生駒山地に、南は羽曳野丘陵に画された地域を対象とした。ここではこの地域の前代からの古墳の編年上のながれと、集落の動向についてみたのち、心合寺山古墳の造営背景について考えてみたい。

1. 対象地域の古墳の編年上のながれ（表1）^(註1)

まず、古墳時代前夜の段階、庄内期においては平野部に周溝墓が顕著にみられる。東郷遺跡、成法寺遺跡、久宝寺遺跡、八尾南遺跡、跡部遺跡、友井東遺跡などである。ほとんどが一辺10～15m前後の方形周溝墓である。また山麓部では、水越遺跡でも庄内期の方形周溝墓、円形周溝墓が確認されている。古墳時代初頭において、対象地域でいち早く古墳が出現するのは、長瀬川左岸地域の久宝寺遺跡周辺である。「久宝寺南その2」の調査の第4号墓がある。^(註2) 割竹形木棺を1基を主体部とし、周溝内より布留式古段階の小型丸底土器等が出土している。また八尾南遺跡では、布留式古段階頃の土師器と川西編年Ⅰ期ないしⅡ期とみられる埴輪を伴う方墳が出土している。^(註3) これらより時期の下るものとして、八尾市北亀井町で出土した久宝寺古墳がある。^(註4) 全長30mの前方後方墳で、小型の方墳2基を伴う。墳丘上に樹立された状態の壺形埴輪が出土した。この壺形埴輪は土師器の長頸壺、二重口縁壺が仮器化した形態のもので、美園古墳まで下らない時期のものと考えられる。

一方、山麓部では向山古墳が築かれる。以後、継続して西ノ山古墳、花岡山古墳と、前期の前方後円墳が造られる。向山古墳は全長55mの前方後円墳または円墳とみられ、壺形土器片が採集されている。西ノ山古墳は全長55mの前方後円墳で、石棺あるいは竪穴式石槨とみられる主体部から、銅鏡、銅鏡等が出土している。花岡山古墳は既に消滅したが、全長約73mの前方後円墳であり、川西編年Ⅱ期に位置付けられる円筒埴輪が出土している。これらは心合寺山古墳の北東方の山麓部に一定のまとまりをもつて築造されており（樂音寺・大竹古墳群）、^(註5) 心合寺山古墳の前代の首長墓とみられる。中ノ谷山古墳は、主体部とその副葬品の内容からみて、前期古墳に限定して捉える要素は少なく、中期に降る可能性もあるのではないかと考える。山麓部では、樂音寺・大竹古墳群の北方、扇状地に川西編年Ⅱ期に位置付けられる鰐付円筒埴輪を伴う円墳の猪ノ木古墳が築造される。^(註6) また、猪ノ木古墳に近接する段上遺跡においても、近年これと同時期の埴輪片が出土しており、同期の古墳の存在が推測されている。^(註7)

前期末には、平野部の長瀬川右岸域から山麓部にかけて小古墳が相次いで出現する。美園古墳、萱振1号墳^(註8)は小古墳でありながら、精巧な形象埴輪をもつ。また中田遺跡、東郷遺跡、小阪合遺跡、成法寺遺跡は、玉串川と長瀬川にはさまれた微高地状の地形に立地し、巨視的には同一の遺跡と見做し得るが、ここでは川西編年Ⅱ期からⅢ期に位置付け得る埴輪を伴う古墳が多く存在していたようである。東郷遺跡では川西編年Ⅱ期に位置付けられる円筒埴輪を樹立していたとみられる方墳が出土している。^(註9) また中田遺跡では、家形埴輪と小型の船形埴輪を有する円墳もしくは前方後円墳とみられる古墳が確認されている。^(註10) この他に包含層内等で埴輪片を確認している箇所、埴輪棺の出土をみた箇所などを併せ、14箇所を確認している。^(註11) また萱振遺跡、田井中遺跡では、埴輪は伴わないが、布留式新段階の土師器を伴う方墳が確認されている。^(註12)

またこれとほぼ同時期に長原古墳群においても造墓が開始する。径約50mの円墳である塚の本古墳を

	八尾市域			大阪市	東大阪市域	大東市域
	山麓部	長瀬川右岸	長瀬川左岸	長原地域		
庄内期 周溝墓を 検出した 遺跡	水越遺跡	東郷遺跡 成法寺遺跡 中田遺跡 友井東遺跡	亀井遺跡 久宝寺遺跡 跡部遺跡	八尾南遺跡		
			久宝寺南第4号墓			
前期	向山古墳 西ノ山古墳 花岡山古墳	美園古墳 萱振古墳 東郷遺跡 想定古墳群 中田古墳 東郷遺跡出土方墳	(八尾南S X 1) 久宝寺古墳 長原古墳群造墓開始 塚の本古墳 高廻り2号墳 長原40号墳 一ヶ塚古墳 猪ノ木塚 古墳	高廻り1号墳 (塚山古墳)	長原古墳群造墓盛行 堂山1号墳 (墓垣内古墳?) 墓の堂古墳	
中期	(中ノ谷山古墳) 心合寺山古墳		長原古墳群造墓盛行	高廻り1号墳 (塚山古墳)	堂山1号墳 (墓垣内古墳?) 墓の堂古墳	

表1 対象地域の古墳の変遷

	古墳名	位置	形状	規模	主体部	副葬品	出土埴輪		円筒埴輪様相	備考	
							種類	状況	突常数	調整	
山麓部	向山古墳	八尾市大竹6丁目	前方後円墳または円墳	全長55m	不明	不明	壺形土器片採集(詳細不明)	—	—	—	採土により詳細不明
	西ノ山古墳	八尾市楽音寺7丁目	前方後円墳	全長55m	石棺あるいは 竪穴式石槨	銅鏡、銅鏡、鉄 劍、鉄刀、玉	前方部で埴輪列 出土	—	—	—	
	花岡山古墳	八尾市楽音寺6丁目	前方後円墳	全長約73m	不明	不明	円筒埴輪片採集 (Ⅰ期)	不明	不明	タテハケ	採土により全壊
	中ノ谷古墳	八尾市楽音寺	前方後円墳もしくは円墳	全長約50m	箱形石棺(二 体埋葬)	碧玉勾玉、碧玉 小管玉、滑石勾 玉、滑石管玉、 同白玉、竪櫛、 石製模造品、鉄 刀、刀子	不明	—	—	—	1933年開墾時発見
平野部 長瀬川右岸	美園古墳	八尾市美園町4丁目	方墳	辺約7.2m	削平	—	壺形、家形	周溝内(壺形 は墳丘縁辺樹 立が転落)	—	—	精巧な造りの家形埴 輪
	萱振1号墳	八尾市萱振町7丁目	方墳 (二段築成)	辺27m	削平	—	鱗付円筒(Ⅱ期)、 家形、盾形、鞍 形、草摺形	段築平坦面に 鱗付円筒を樹 立。他は周溝 内。	6条 5条	・タテハ ケ ・タテハケ ・ヨコハケ ・タテハケ ・ナデ	精巧かつ大型の鞍形 埴輪
	東郷御跡桜ヶ丘3丁目出土 古墳	八尾市桜ヶ丘3丁目124-1	方墳?	辺7m以上	削平	—	円筒埴輪(Ⅱ期)、 土師器	周溝内転落状 態	3条	・タテハケ →A種ヨコ ハケ	
	中田古墳	八尾市八尾木北6丁目	円墳(前方後 円墳の可能性 残る)	径33.5m	削平	—	普通円筒(Ⅱ期)、 朝顔形、家形、 船形	周溝内	3条	・タテハケ →ストロー クの長いA 種ヨコハケ ・タテハケ ・ナデ	小型の船形埴輪
平野部 長瀬川左岸	久宝寺古墳	八尾市北龜井町3丁目1番72	前方後方墳	全長35m前後	削平	—	壺形埴輪(二重 口縁、直口)	墳丘縁部樹立 状態	—	—	
	久宝寺南その2第4号墓	八尾市西久宝寺	方墳	9.0m×7.0m	割竹木棺1	なし	なし	—	—	—	周溝内より布留式古 段階の小型丸底土器 等出土
八尾南	八尾南SX1	八尾市若林町	方墳	辺11.5m	削平	—	普通円筒(Ⅰ～ Ⅱ期)	周溝内	不明	不明	周溝内に布留式古段 階甕供獻
長原古墳群	塚の本古墳	大阪市平野区長吉長原東3丁目	円墳	径約50m	不明	—	普通円筒(Ⅱ期)、 朝顔形、家形、 鞍?	周溝内	3条か	・タテハケ ・ナデ ・タテハケ	
	～ヶ塚古墳	大阪市平野区長吉川辺1丁目	造り出し付円 墳	全長53m	不明	—	普通円筒(Ⅱ期)、 鱗付円筒、朝顔 形、壺形、囲み 形、家形、盾形 鞍形、草摺形、 蓋形	周溝内墳丘周 辺	3条? 4条?	・タテハケ →ストロー クの長いA 種ヨコハケ ・タテハケ ・ナデ	土師器片出土
	高廻り2号墳	大阪市平野区長吉長原2丁目	円墳	東西19.6m 南北18.7m	削平	—	普通円筒(Ⅱ期)、 壺形、家形、盾 形、鞍形、草摺 形、短甲形、 蓋形、船形	普通円筒一墳 丘縁部樹立状 態他は周溝内	3条? 4条?	・タテハケ →ストロー クの長いA 種ヨコハケ ・タテハケ ・タテハケ	
	高廻り1号墳	大阪市平野区長吉長原2丁目	方墳	東西15.1m 南北15m	削平	—	普通円筒(Ⅲ期)、 朝顔形円筒、家 形、盾形、鞍形、 盾形、短甲形、 草摺形、船形、 さしづら形	周溝内及び 墳丘残丘上	大型品 4条以 上?	・タテハケ →ストロー クの長いA 種ヨコハケ ・タテハケ →B種ヨコ ハケ	土師器片出土 小型品、中型品、大 型品あり
	猪ノ木古墳	東大阪市南四条町	円墳	径30m	不明	不明	鱗付円筒(Ⅱ期)	墳丘裾上他	4条	・タテハ ケ ・タテハケ →A種ヨコ ハケ	葺石あり、子持ち匂 玉出土

表2 対象古墳一覧

遺跡名	NO	調査地	出土位置	埴輪の種類	円筒埴輪の調整技法	埴輪の時期	文献
八尾市							
萱振1号墳	1	萱振町7丁目地内	テラス部分樹立状態	鱗付円筒	タテハケーナデ、タテハケー A種ヨコハケ、	II期	(1)
			周溝内転落	家、盾、草摺、轂			
萱振	2	緑ヶ丘1丁目117-8	包含層内混入	家		II～III期？	(2)
	3	旭ヶ丘5丁目85-2他	方墳2。埴輪の出土なし。布留式新相の土器出土。				(3)
美園古墳	4	美園町4丁目地内	方墳周溝内転落	家、壺			(4)
東郷	5	桜ヶ丘3丁目124-1	方墳周溝内転落状態	円筒	タテハケーA種ヨコハケ	II期	(5)
	6	光町1丁目43、44	包含層	円筒	タテハケ	II期	(6)
成法寺	7	清水町2丁目2-5	包含層内	円筒	タテハケーA種ヨコハケ	II期	(7)
	8	光南町1丁目46・47-1	円筒棺	円筒	タテハケ	II期	(8)
			溝内埋土混入？	家形？		不明	(8)
小阪合	9	青山町4丁目地内	自然河川内	円筒	一B種ヨコハケ、	III期他	(9)
				家、蓋、			(9)
	10	南小阪合1丁目地内	円筒棺	円筒、朝顔	一タテハケ	II期	(10)
	11	南小阪合1丁目地内	溝内混入	円筒	一ヨコハケ？	III期？	(11)
			溝内混入	円筒、盾、轂？	一ヨコハケ？	III期？	(11)
	12	南小阪合1丁目地内	溝内	円筒		II～III期	(12)
中田	13	八尾木北6丁目地内	円筒棺	円筒、朝顔		II期	(13)
	14	中田3丁目地内	不明	円筒	タテハケーA種ヨコハケ	II期	(14)
	15	八尾木北6丁目地内	周濠内転落	円筒、朝顔、家、船	タテハケーナデ、タテハケー A種ヨコハケ	II期	(15)
	16	中田1丁目20他	包含層内混入	円筒	タテハケ	II期	(16)
				家、不明形象埴輪			(16)
矢作	17	高美町3丁目46-1	包含層内	円筒	一ヨコハケ	III期	(17)
東弓削	18	八尾木東1丁目地内	包含層内	円筒	タテハケーB種ヨコハケ	III期	(18)
田井中	19	空港1丁目81	円墳？1、方墳？1。埴輪の出土なし。布留式新相の土器出土				(19)
八尾南	20	若林町1丁目地内	方墳周溝内埋土	円筒	タテハケ	I～II期	(20)
恩智	21	恩智中町4丁目55他	包含層内	円筒	一ヨコハケ	III期	(21)
東大阪市							
猪ノ木塚古墳	22	東大阪市南四条町	墳丘上転落	鱗付円筒	一タテハケ、タテハケー A種ヨコハケ	II期	(22)
段の上遺跡	23	東大阪市下六万寺3丁目地内	包含層内	鱗付円筒	一タテハケ、タテハケー A種ヨコハケ	II期	(23)

表3 川西編年II～III期埴輪出土古墳等一覧

表中文獻

- (1) 本文註10 (2) 西村公助「萱振遺跡第4次調査(KF86-4)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(3) 本文註13 (4) 本文註9 (5) 本文註11 (6) 米田敏幸「東郷遺跡第21次埋蔵文化財発掘調査概要」1986年 (7) 高萩千秋「第3次調査(SH-3)発掘調査報告」『成法寺遺跡』1991年 (8) 坪田真一「成法寺遺跡(SH89-5)」『平成4年度八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(II)』1992年 (9) 高萩千秋「小阪合遺跡」<昭和57年度第1次調査報告書> (10) 高萩千秋「小阪合遺跡」<昭和59年度第4次調査報告書> (11) 西村公助「小阪合遺跡発掘調査概要」(12) 山上弘「小阪合遺跡発掘調査概要・II」大阪府教育委員会1989年 (13) 柏本武雄 奥田尚『西ノ京周辺史』1982年 (14) 吉田野々「中田遺跡(91-293)の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書II』八尾市教育委員会1992年 (15) 本文註12 (16) 岡田清一「平成6年度八尾市文化財調査研究会事業報告」1995年 (17) 原田昌則「矢作(第1次調査)発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 平成元年度』八尾市文化財調査研究会1989年 (18) 原田昌則「東弓削遺跡第4次調査(HY88-4)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』八尾市文化財調査研究会1993年 (19) 本文註13文献 (20) 本文註4文献 (21) 原田昌則「恩智遺跡(OJ89-4)」『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度』八尾市文化財調査研究会1990年 (22) 本文註7 (23) 本文註8

※埴輪の時期は、川西宏幸氏の編年に拠る。

はじめとし、一ヶ塚、高廻り1号墳・同2号墳、長原40号墳等がある。これらはすべて川西編年のⅡ期の円筒埴輪を伴う。^(註14)

中期にはいると平野部では、東郷遺跡・中田遺跡とその周辺で、包含層等から川西編年Ⅲ期の円筒埴輪片が若干出土しているものの、総体としては小古墳の造営が目立たなくなる。山麓では、中ノ谷古墳が中期初頭に位置付けられる可能性がある他、東大阪市の塚山古墳においても川西編年Ⅲ期に位置付けられる円筒埴輪や形象埴輪が採集されている。この古墳は発掘調査がなされていないが、扇状地末端部に立地し、直径25mの二段築成の円墳の可能性が考えられている。そして中期前半末には、全長140mの前方後円墳である心合寺山古墳が八尾市の東部山麓の扇状地上に築造される。心合寺山古墳とほぼ同時期もしくは若干時期の下るものとして、大東市堂山1号墳がある。これは山麓の尾根先端部に築かれた径25mの円墳で、箱式木棺を主体部とし、武具・武器類等が出土した。円筒埴輪は心合寺山古墳のそれと形態、技法などに類似するものが認められ、ほぼ同時期の様相をもつものであることが指摘されている。^(註15)

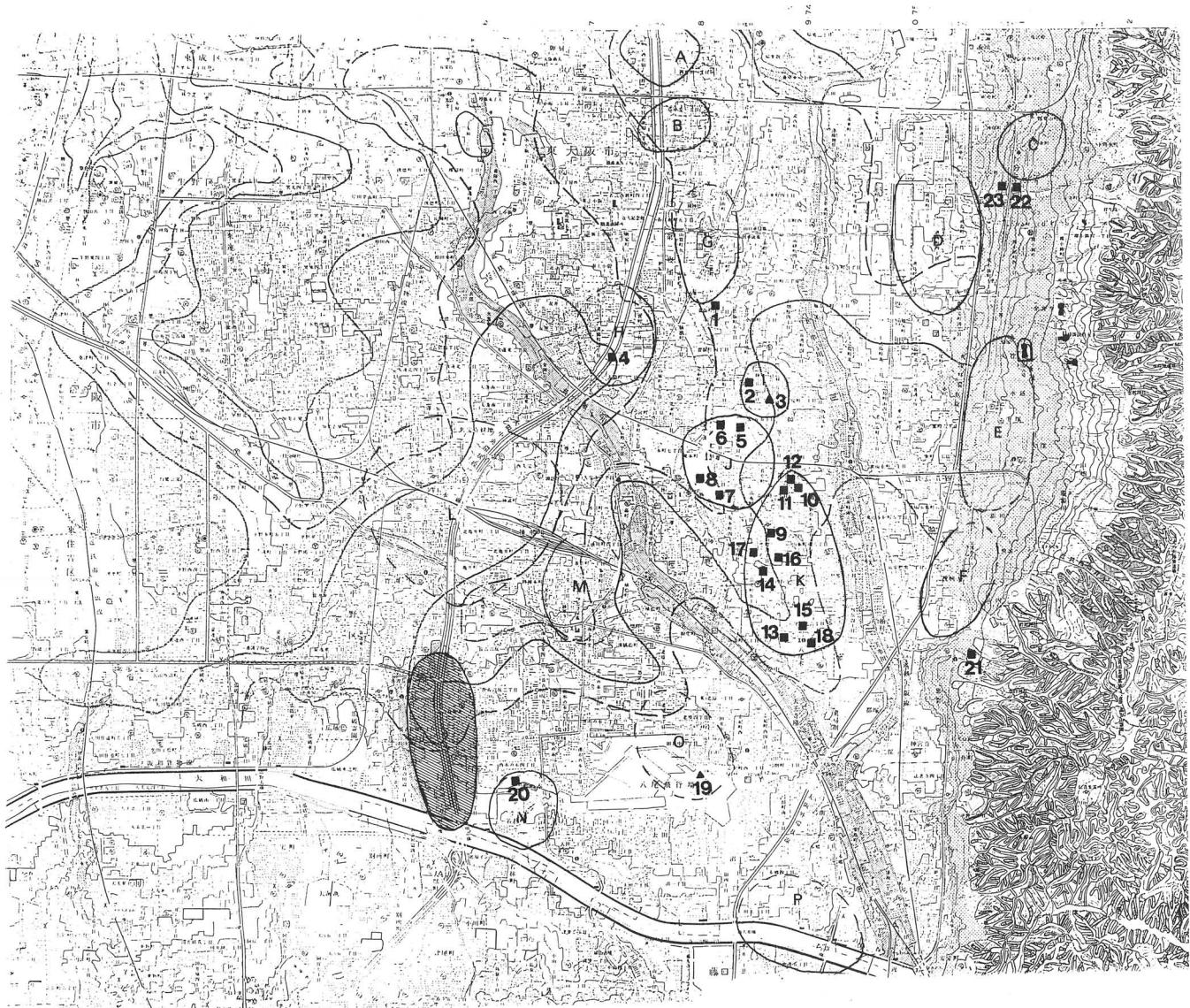
以上の対象地域の編年上の流れのなかで、前期末に小古墳が相次いで出現する事、中期前半末に中河内最大の前方後円墳である心合寺山古墳が築造されることが、大きな画期として捉えられる。

2. 古墳と集落のあり方（図1）

古墳と同期の集落遺跡のあり方を、分布図を作成して検討してみた。まず平野部からみてみたい。東郷遺跡・中田遺跡とその周辺では、集落遺構は庄内期から布留式の古段階に最も顕著に確認されているが、この後も引き続き集落の遺構が認められる。また美園古墳の立地する美園遺跡、萱振1号墳の立地する萱振遺跡も、庄内期から引き続き布留式新段階にも集落の痕跡が認められる。さらに田井中遺跡でも布留式新段階の集落遺構が認められる。次に山麓部では猪ノ木古墳等の立地する縄手遺跡でも布留式中新段階の土師器片が出土している。^(註16)さら山麓部では 池島・福万寺遺跡、大竹西遺跡のあり方が注意される。これらの遺跡は近接しており、遺跡の内容からも同一の遺跡とみなしてよいものと思われる。^(註17)池島・福万寺遺跡では、古墳時代前期には遺跡の東方で、平行する大溝、土壙等が検出されている。ここでは人為的に埋められたとみられる土器の他に、神獸鏡、方格四乳鏡の破片や、水鳥形土製品の部分破片、堅櫛等が出土している。また、大竹西遺跡においても、古墳時代前期の掘立柱建物、井戸、溝、土壙が検出されており、土壙内から瑪瑙製鏡形石製品が出土している。^(註18)当遺跡の北東山麓には向山古墳、西ノ山古墳、花岡山古墳といった前期の首長墓があり、これらの首長墓を輩出した拠点的な集落と考えられている。^(註19)中期の心合寺山古墳築造段階の当遺跡の様相は今一つ明らかではないが、恐らくは当遺跡を含めた山麓の集落群が、心合寺山古墳の造墓主体の拠点であったものと思われる。

3. 時期別の古墳の動向

対象地域の古墳の動向を前期後半までの段階と、中期前半の段階とに分けてみていきたい。まず前期後半には、山麓部では相次いで前方後円墳が築造される。これらは向山古墳を始めとする首長系譜を辿ることができ、池島・福万寺遺跡一帯の集落を拠点とした在地的な集団の首長墓とみられる。一方平野部では、長瀬川と玉串川に挟まれた地域に小古墳が相次いで造られる。これらは長原古墳群の造墓開始期とほぼ同時期とみられる。これについては既に先学により評価がなされており、長原古墳群、美園古墳、萱振1号墳などの中小古墳が、大王権力により掌握された在地的な集団の墓である可能性が指摘されている。^(註20)今回検討を行うなかで、美園古墳、萱振1号墳の他に、中田遺跡・東郷遺跡とその周辺一帯にも、川西編年Ⅱ期に位置付けられる円筒埴輪をもつ小古墳が分布することが明らかになった。この中で埴輪を伴う古墳として明らかなものは、中田古墳や東郷遺跡内方墳がある。一部Ⅲ期に下る可能性もあるが、包含層内等で形象埴輪片の出土しているところは6ヶ所ある。さらに注意されるのは、これらに混在するかのようにして、埴輪棺がみられることである。成法寺遺跡、小阪合遺跡、中田遺跡でそれ



- A. 西岩田遺跡
- B. 瓜生堂遺跡
- C. 縄手遺跡
- D. 池島・福万寺（大竹西）遺跡
- E. 水越（大竹、太田川）遺跡
- F. 恩智遺跡
- G. 萱振A遺跡
- H. 美園（友井東、佐堂）遺跡
- I. 萱振B遺跡
- J. 東郷（成法寺、小阪合）遺跡
- K. 中田（東弓削）遺跡
- L. 久宝寺（亀井、加美）遺跡
- M. 跡部（太子堂）遺跡
- N. 八尾南遺跡
- O. 田井中（志紀）遺跡
- P. 本郷、船橋遺跡
- 長原遺跡、長原古墳群

※ 図中の数字は表3の番号に対応
 ※ 土地条件図（大阪東南部）をもとに作成

図1 古墳と集落の分布

ぞれ確認されている。また萱振1号墳の存在する萱振遺跡では、埴輪は伴わないが布留式新段階の土師器を伴う方墳2基が確認されている。これらは恐らく埴輪を持ち得なかった、あるいは墳丘を築き得なかった在地の階層の墓と思われる。埴輪を伴う古墳については、このような埴輪を伴わない古墳や埴輪棺と混在するかのようにして存在すること、先にみたように同期の集落と近接して分布することから、在地の有力層の墓とみられる。これらが長原古墳群、美園古墳、萱振1号墳のように大王権により直接掌握された層とみることができるとみるが、未だ判然としない点が多い。が、長原古墳群、美園古墳、萱振1号墳と同時期にこの地域に相次いで小古墳の築造されることは、在地の有力層が大王権となんらかのかたちで関わることで、埴輪を樹立する古墳を築き得たとみてよいのではないかと考える。ただ長原古墳群については、羽曳野丘陵先端部の限定された墓域を有することから、美園古墳、萱振1号墳、中田遺跡・東郷遺跡とその周辺の小古墳といった長瀬川右岸域に分布する小古墳とは、性格を異にする古墳群であると思われる。

中期前半の段階には平野部での小古墳の造営は急速に後退する。一方山麓部では中河内最大の規模をもつ心合寺山古墳が築造される。これは前期に山麓に首長墓を営んだ在地の集団の首長系譜をひくものとみてまちがいないであろう。心合寺山古墳の北方に位置する塚山古墳、大東市堂山1号墳との関係が注意される。ここでは発掘調査により様相の判明している堂山1号墳と心合寺山古墳の比較を行ってみた（図3）。

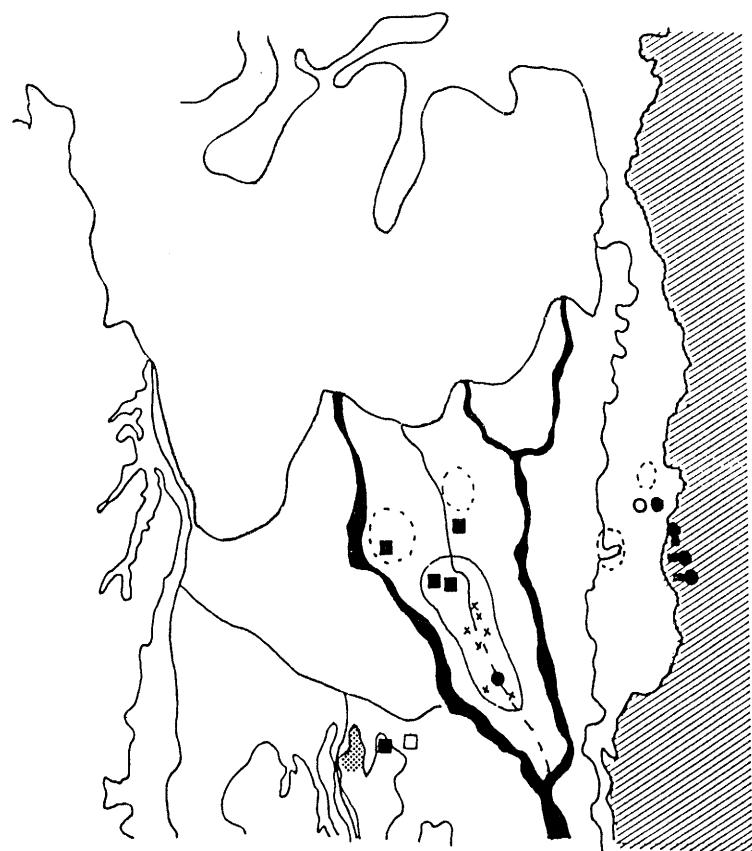
4. 心合寺山古墳と堂山1号墳

心合寺山古墳と堂山1号墳では、墳丘の形態や規模、埴輪の器種などの格差は大きい。しかし円筒埴輪の小型品は同じ4条突帯、5段構成である。両者の円筒埴輪は形態、技法などに共通点があり、さらに古市古墳群の円筒埴輪にはみられない独自性をもつことから、地域の工人集団による製作が想定される。しかし同一の規格でありながら、堂山1号墳の円筒埴輪は心合寺山古墳のそれより一回り小さい。このことは心合寺山古墳の造墓主体から堂山1号墳の造墓主体に対する、円筒埴輪の法量の格差づけという規制が働いていたことを示すものではないだろうか。このことからこの段階においては心合寺山古墳の造墓主体を頂点とする地域の範囲が現在の大東市付近まで及んでいた可能性がある。

5. 心合寺山古墳の造営背景

これまでみてきたように、心合寺山古墳は山麓部を中心とした在地の集団を母体とし、古墳時代中期前半には、現在の大東市付近の範囲までその権力を及ぼした首長の墓とみられる。この範囲を政治的、社会的なまとまりをもった一地域と想定するならば、このような地域を治めた地域首長として心合寺山古墳の被葬者を考えることができよう。地域首長墓としての心合寺山古墳の造営の背景には、この地域の自立的な発展があることは言うまでもない。ただ古墳時代前期の段階で既に平野部では、大王権の関与を受けた小古墳が成立していること、心合寺山古墳が前代の首長墳とは隔絶した規模・内容を有していることから、心合寺山古墳の造営の背景には大王権の関与があったものと考えられる。すなわち、誉田御廟山古墳は心合寺山古墳とそれほど時を隔てずに築造されたとみられるが、その規模は墳長425m、周濠・外堤を含めた全長は700mを測る前方後円墳である。さらに円筒埴輪は、外堤で出土しているものでは7条突帯で器高が90cm前後になるものである。^(註23)心合寺山古墳は大型品の円筒埴輪、豊富な形象埴輪を有しながらも、埴輪列の主たる構成要素である円筒埴輪の小型品は、器高60cm前後で4条突帯のものである。墳丘長140m前後の前方後円墳の心合寺山古墳が、径約25mの円墳である堂山1号墳と円筒埴輪において同規格であることは、既に指摘されているような円筒埴輪の規格性にみられるような規制を、^(註24)大王権から受けていたことを示すものと考えられる。

前期後半頃



中期前半頃

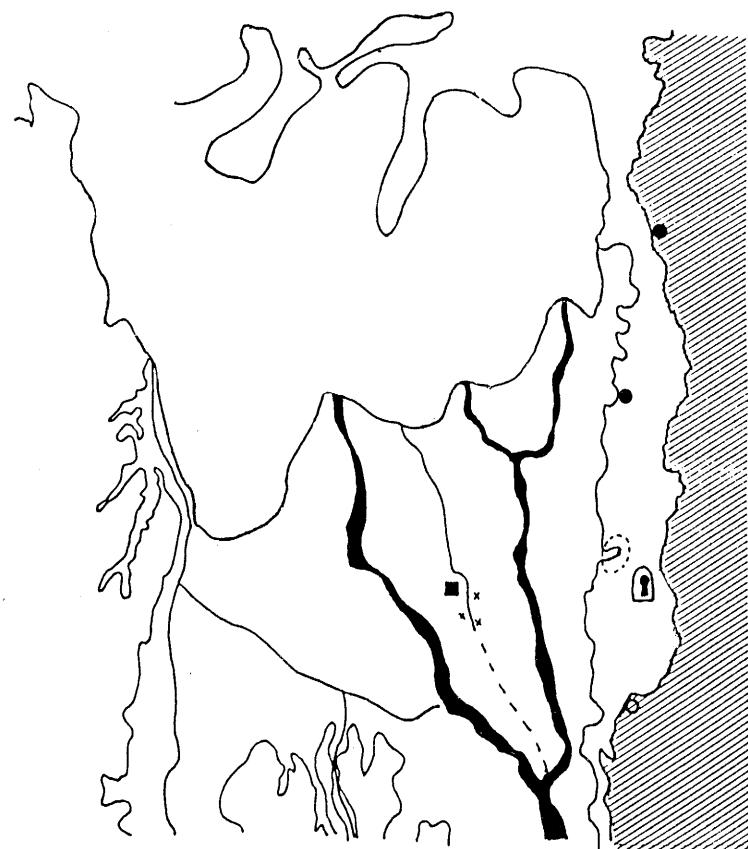
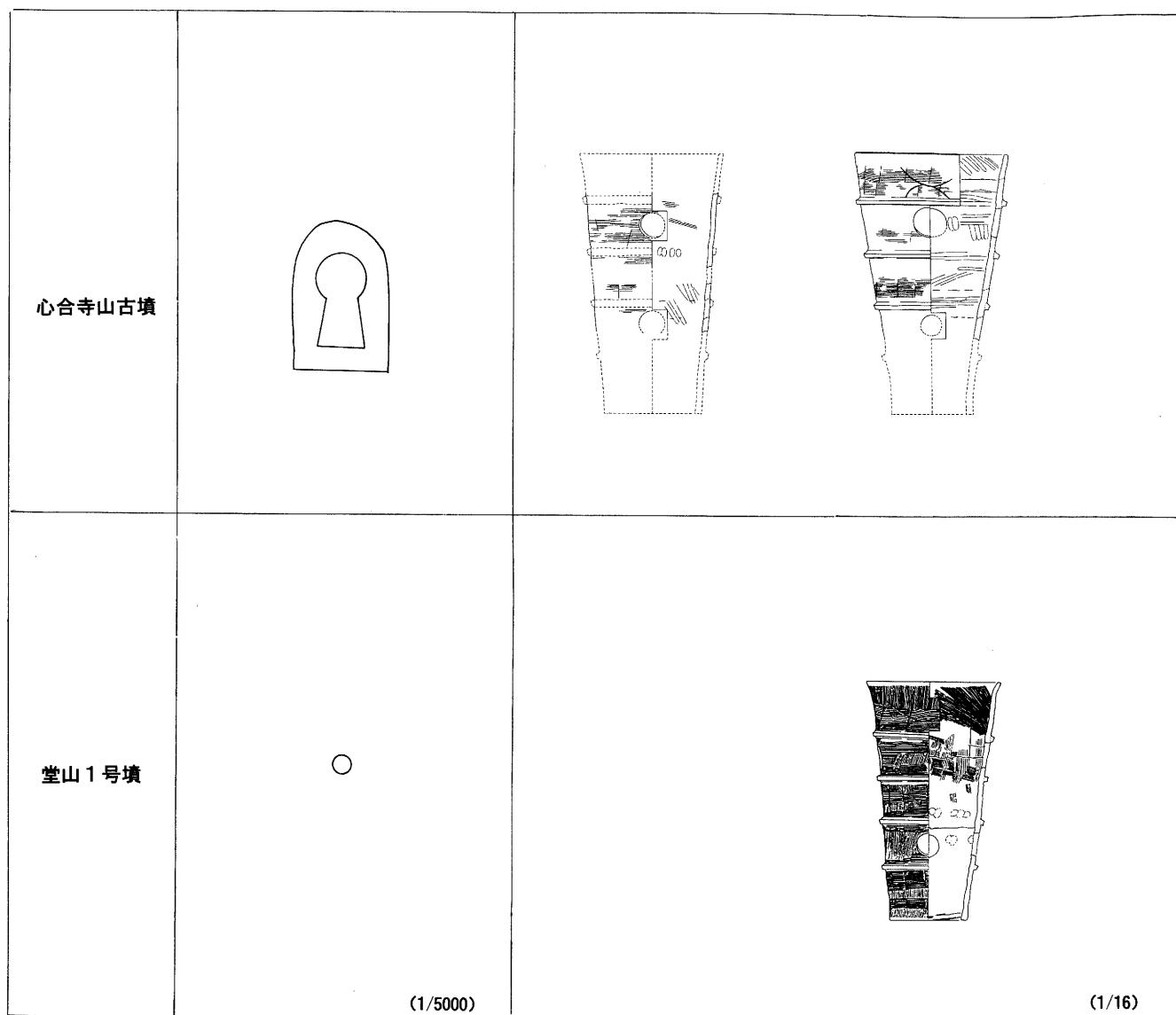


図2 対象地域の時期別の古墳の動向



円筒埴輪の種類		形象埴輪の器種						
	大型品	小型品						
心合寺山古墳 (墳丘長約140m)	底径33~44cm	全高 約60cm 底径 17~22cm (平均)	家形	蓋形 (大型、小型)	甲冑形	盾形	韌形	壺形 (大型、小型)
大東市堂山1号墳 (墳丘径約25m)	—	全高 56cm 底径 17~19cm (平均)	家形	蓋形	甲冑形	?	韌形	—

(堂山1号墳の円筒埴輪は註16文献より転載)

図3 心合寺山古墳と大東市堂山1号墳

5. おわりに

心合寺山古墳の築造された古墳時代の中期前半頃までは、対象地域の少なくとも山麓部一帯は、一つの地域として、比較的独立性を保っていたのではないかと考えている。このことは、心合寺山古墳の埴輪の地域性としても表象されている。しかしこの地域性には、埴輪の製作技法などにみられるような先進的な要素も伺える。また円筒埴輪や形象埴輪の一部が、他地域から持ち運ばれている可能性のある事も注意される。さらに心合寺山古墳の墳丘プランは、現在わかっている範囲でも、精密な築造企画、高度な築造技術の存在を予想させるものである。このことは大王権と密接な関係を有しながらも、集団内の労働力を総結集して地域首長墓を造営した当地域の多様性、先進性を示しているかのように思われる。その具体的な様相については、未だ不明な点が多い。今後の調査・研究の課題としていきたい。

末筆となりましたが、小稿を草するにあたっては、(財)大阪府文化財調査研究センターの秋山浩三氏に多大なお世話を受け、多くのご教示をいただきました。また、大阪府教育委員会の小林義孝氏、亀島重則氏、同じ職場の米田敏幸氏からは有益なご教示をいただきました。そして対象地域の集落や古墳の動向の問題を考えるにあたっては、(財)八尾市文化財調査研究会の岡田清一氏、同じ職場の斎藤氏との勉強会での議論から、多くのご教示を得ました。記して謝意を表します。

本文註

- (註1) 対象地域の古墳の編年上のながれを考えるにあたっては、主に下記の文献を参考にした。
八尾市史編集委員会 増補版『八尾市史(前近代) 本文編』1988年
秋山浩三「第6章 河内 第1節 北・中河内」『前方後円墳集成 近畿編』1992年
- (註2) 一ノ瀬和夫『久宝寺南(その2)』大阪府教育委員会(財)大阪文化財センター 1987年
- (註3) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2・第4号 1978年。
以下、各々に註を付していないが、円筒埴輪の編年は本文献に拠った。
- (註4) 米田敏幸他『八尾南遺跡』八尾南遺跡調査会 1981年
- (註5) 成海佳子「久宝寺遺跡の調査概要」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第25回)資料』1992. 1. 19
成海佳子「久宝寺遺跡第9次調査(KH91-9)」『平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』1992年
(財)八尾市文化財調査研究会の成海佳子氏に実見の便宜を計っていただいた。さらに有益なご教示をいただいた。
- (註6) 吉岡哲「八尾市西ノ山古墳・中ノ谷古墳の出土遺物について」『古代学研究』83号 1977年
- (註7) 萩田昭次・藤井直正「四条地区的考古資料」『河内四條史』第2巻 史料編I 1977年
- (註8) (財)東大阪市文化財協会「段上遺跡第3次発掘調査」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第32回)資料』(財)大阪府文化財調査研究センター 1995年6月11日。(財)東大阪市文化財協会の別所秀高氏に実見の便宜を計っていただいた。さらに有益なご教示をいただいた。
- (註9) 渡辺昌宏他『美園』大阪府教育委員会(財)大阪文化財センター 1985年
- (註10) 広瀬雅信「萱振遺跡調査速報」『八尾市文化財紀要I』八尾市教育委員会 1985年
高橋克壽「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第2号(通巻162号) 1994年
- (註11) 高萩千秋「東郷遺跡-第23次・第24次発掘調査報告」(財)八尾市文化財調査研究会 1991年
- (註12) 坪田真一「中田遺跡第19次調査現地見学会資料」1993年11月27日(財)八尾市文化財調査研究会
坪田真一「中田遺跡第19次調査(N T93-19)」『平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』1994年
坪田真一「第28期郷土文化講座第7回「八尾を掘る」資料』1994年2月14日
(財)八尾市文化財調査研究会の坪田真一氏に実見の便宜を計っていただいた。さらに有益なご教示をいただいた。
- (註13) (財)八尾市文化財調査研究会「萱振遺跡第12次発掘調査現地説明会資料』1992.5.30
原田昌則「萱振遺跡第12次調査(KF91-12)」『平成4年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』1993年
原田昌則・西村公助「田中井遺跡第11次調査(TN93-11)」『平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』1994年
(財)八尾市文化財調査研究会の原田昌則氏・西村公助氏より有益なご教示をいただいた。
- (註14) 長原遺跡調査会(財)大阪市文化財協会(改訂版)「大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告」1978年 1982年改訂
積山洋「一ヶ塚古墳(85号墳)」「一ヶ塚古墳(長原85号墳)の埴輪編年」櫻井久之「一ヶ塚古墳の形象埴輪」『大阪市平野区長原・瓜破遺跡発掘調査報告II』(財)大阪市文化財協会 1990年
田中清美・京嶋覚・高井健司・櫻井久之・高橋勝行・岡村勝行他『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告IV』(財)大阪市文化財協会 1991年
- (註15) 中西克弘「塚山古墳採集の埴輪」『財団法人東大阪市文化財協会ニュース』VOL. 1. 2 1986年
- (註16) 大阪府教育委員会「堂山古墳群」1994年
- (註17) 小浜成「堂山1号墳出土円筒埴輪の検討」『堂山古墳群』大阪府教育委員会 1994年
- (註18) 繩手遺跡調査会「繩手遺跡1」1971年
- (註19) (財)大阪文化財センター「第7回池島・福万寺遺跡現地説明会資料」1995年
- (註20) (財)八尾市文化財調査研究会「大竹西遺跡現地説明会資料I」1990年10月10日
(財)八尾市文化財調査研究会「平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」1992年
- (註21) (財)大阪文化財センター「第7回池島・福万寺遺跡現地説明会資料」1995年3月11日
- 秋山浩三「北・中河内の古墳編年と首長墳系列」『研究資料II』大和古中近研究会1996年刊行予定
- (註22) 櫻井久之「埴輪と中小規模古墳-長原古墳群の形象埴輪」『季刊 考古学』第20号 1987年
- (註23) 一ノ瀬和夫・伊藤雅文「応神陵古墳外堤発掘調査概要」大阪府教育委員会 1981年
また埴輪研究会の折りに大阪府教育委員会一ノ瀬和夫氏より実物を実見させていただいた。
- (註24) 円筒埴輪の規格性については、主に下記の文献を参考とした。
坂靖「奈良県の円筒埴輪」『橿原考古学研究所論集』第11』1994年
笠井敏光・吉田珠己「古市古墳群の埴輪の規格性」『古代文化』44 1992年